

優秀賞

テーマ2：医療と福祉、わたしの体験
「新しく見える世界」

神奈川県・相洋高等学校3年 鳥居 陽生

私は16年間生きた人生から新たに第二の人生を歩んでいる。

高校1年生の秋、目の病気で倒れた。幼稚園の時から続けていた野球で高校に入学し、甲子園を目指して日々努力していた時だった。ある日、キャッチボールしていた時、野球人生で初めて恐怖を感じた。ボールが見えなかったのだ。視力が悪くなったのかと思ひ地域の眼科にかかったところ、何も問題は無かった。大事をとり他の病院に行ったが、原因は分からなかった。そしていくつかの病院を回った中で、国際医療福祉大学で検査を受け、翌年の1月に視神経の病気であるレーベル遺伝性視神経症であることが分かった。初めは左目だけだったが右目にも転移し、今まで見えていた世界とは全く違う世界が見えている。それと同時に、「何を糧に生活をすればいいのかわからない絶望感」にさいなまれる日々が始まった。

家族や友人の顔も見えなくなり人と話すのが苦手になっていった。そして、幼いころから大好きだった野球もできなくなった。日常生活も歩くことや柱にぶつかったり字をうまく書けなかったり、食事の時も食器や食器が見えないためうまくつかめなかったりこぼしてしまったりした。今までの、ほとんど不自由のない生活から一変し、できないことが増えていった。何をしてもうまくできない。私は私のことが嫌になっていった。

しかし、「できないからといって自分のことを嫌いになってもできるよつにはならない」と私は思った。その日から、できなくても、とにかくできるまで挑んだり、どうしたらできるのか試行錯誤を行ったりする日々が続いた。そして周りのサポートを受けながら、今までに近い生活を送ることができるようになった。病気になるってから内気になって

しまつ日々が続いたが、何事もポジティブにとらえられるようになってからは、家族と遠出をしたり友人たちと食事をしに行ったりと、何をするにも楽しくもつともつとさまざまなことをしたいと思うようになった。大好きな野球も部員と共に練習はできないが、裏方にまわり全力でサポートしたり、合間の時間を見つけてはいつ治っても復帰できるようにトレーニングを行ったりした。

そんなある日、リハビリで通院していた病院でパラスポーツをやってみないかと勧められ、ゴールボールという競技に出会えた。そのきっかけから、世界の舞台を目指し日々努力を重ねている。病気を抱えてから今まで一度は下を向いてしまつたが、周りの人の支えがあつたから、どのような困難があろうと上を向いて頑張ることができた。その中で、原因が分かるまでさまざまな検査を行つてくださった医師や看護師の方々、リハビリでお世話になつた指導員の方々にも感謝したい。地域の病院から始まり、病院から病院へと移るたびに不安が募つたが、医療現場の方々が明るく優しく対応してくださるうちに、いつの間にか不安は消えていた。

そのような姿を見てみると、とてもかっこよく勇気をもらえた。病院には多種多様な病気やけがをしている人たちが来ているが、医師や看護師の方々は症状に合わせた対応はもちろん、患者の心理状態にも合わせた声かけなど身体だけでなく心のケアまでもしていた。その姿を見て、私なりではあるが、同じように病気によつて苦痛を感じ気持ち下がを向いてしまつている子どもや大人の方々に、少しでも勇気や元気を届けられるように生きていきたいと思つた。

今まで見えていた世界よりはつきりとは見えないが、今見える世界の方が明るく鮮やかに感じた。